



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報 No.49 2019.5

目次

図書館と私 昭和～平成～令和	<巻頭言>	1
あなたの知らない医学部分館	<特集>	3
太宰治自筆ノート	<デジタル・アーカイブの紹介>	6
展示コーナー、見えますか！？	<図書館の話題>	8
読書は人生の羅針盤	<本との出会いを楽しむ>	10
Library News		11
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧		12

図書館と私 昭和～平成～令和

理事（社会連携担当）・副学長 石川 隆洋



私は本が好きだ。幼い頃は文字だらけの本より絵柄の本が好きだった。次第に小説なども好んだが、図鑑や地図帳には及ばない。図鑑や地図帳を見ては思いを世界に巡らせた。ジャンルは問わず多読であったが、一番好きだったのは魚類図鑑だったと思う。朝から晩までまるで水族館にいるかのように図鑑を擦り切れるまで読んでいた。年長になるに従い、好奇心は高まるばかり。本をもっともっと読みたくなり、小学校の図書室に暇を見つけては入り浸った。図書室内はいつも凜とした空間があった。その時から、私は本に囲まれた静かな空間が大好きになった。昭和44年（1969）、小学校の図書室にあるテレビを囲み、米国のアポロ11号が史上初めて月面に着陸した映像を皆が固唾をのんで見守る中、月への第一歩が告げられた瞬間に歓声が上がったが、私はむしろ図書室内の静寂が破られたのを子供ながら残念に思ったものだ。

その後、弘前公園内にある弘前市立図書館にほぼ毎週のように通い始めた。市立図書館の閲覧室

は生徒向けと一般向けがあったが、静かに本を読まない子供が多い生徒向けから一日でも早く一般向けに行きたいと思うようになっていた。いつしか更なる図書館の空間を求めようようになって、高校生の時、恐る恐る弘前大学附属図書館を訪れた。高校の図書室は勿論、市立図書館とは比べようもなく、大学図書館は私を魅了した。当時は、一般の方は大学図書館を利用できなかったが、こっそり自習や蔵書の閲覧などを楽しんだ。それは高校生の私にとって至福の時であった。退去を求められたその時までは、時代をちょっと先取りしてしまったかもしれない。今では懐かしい思い出だ。

平成を迎えたのは弘前勤務の時だが、当時、弘前市立図書館は弘前公園内から弘前市下白銀町に新築移転（平成2年（1990））が決まり、ほとんど足を向けることはなくなっていた。何故だろう。昔ほどは本を読むことはなくなっていたし、立地条件が弘前公園内ではなくなったことも大きく影響しているかもしれない。その後、青森では青森県立図書館を利用した。県立図書館は、青森県庁

に隣接し、立地条件としては最適だった。また建物は大変趣があり、大講堂（ホール）を改装した一般・生徒閲覧室や円形階段など私の興味を引いた。しかし、その県立図書館も、私が弘前から青森に転勤した4年後の平成6年（1994）、青森市荒川に新築移転してしまった。勤務先からは遠くなり、その後ほとんど足を向けることはなくなった。県立図書館の移転構想を契機に、青森市内の利用可能な図書館を探索していた。平成5年（1993）、青森県庁西棟1階に青森県議会図書室が移転開設し、県議会開会中を除けば一般の方も利用できることから、青森勤務時代はもっぱら議会図書室を利用した。立地条件は申し分なく、また大変静かな環境の下で読書や資料検索そして瞑想できる空間をついに見つけたのだ。その後平成を終えるまで、議会図書室は私にとって大切な空間となり続けた。

また私は、弘前から青森までは電車通勤だったので、片道40分程度の時間を読書に充てていた。本は、平成13年（2001）に青森市松原から青森駅前の複合施設「アウガ」に移転してきた青森市立図書館を利用した。通勤時の私の読書空間は列車内であり、列車内という喧噪の中ではあるが私だけの空間の確保に努めた。座席確保ができなければ読書空間ができないことから、通勤者の多くが利用する時間帯の1 or 2本前の列車に乗車するよう心掛けた。早起きの習慣はここで培われたものだ。

当時は仕事以外の様々なジャンルの本を、まるで子供の頃に戻ったように読みふけていたように思う。ただ、残念なことは、通勤し始めの頃は多くの人が列車内で本か新聞を読んでいたのに、パソコンやスマホが台頭してきて、次第に本や新聞を読む人は少数派になってきたことだ。先日も弘前から青森までの電車移動の間、本を読んでいたのは私だけで、老いも若きもスマホをいじっていた。列車内の静寂さは保たれているとはいえ、空しくなるのは私だけだろうか。

確かに、今の時代、パソコンやスマホがあればほとんど足りる便利な世の中になったとは思いますが、私としては、沢山の蔵書に囲まれ、温度管理がなされた静かな環境で、本を読んだり、空間を楽しんだりするのが好きなのだ。それを満たしているのが図書館。だから私は図書館が好きなのだ。今も、時折、弘前大学附属図書館の資料室の中に身をおいて、考えを巡らせることがある。凜とした雰囲気は実に小気味よい。図書館の利活用に対する考え方は人それぞれ。むしろ自分の考えを押し付けようとは思わない。時代は平成から令和へと変わり、巷ではお祭り騒ぎの体だが、私はこれからも図書館を利用する。今度はどんな出会いがあるだろうか。埋もれた資料の中から何が発見できるだろうか。はたまた新着本からどんな知識を得ることができるだろうか。ワクワクしてくる。明日が楽しみだ。

（いしかわ たかひろ）

～著者のプロフィール～

石川 隆洋（いしかわたかひろ）

弘前大学理事（社会連携担当）・副学長

昭和55年4月青森県採用、青森県観光交流推

進課長、青森県観光国際戦略局参事、青森県観

光国際戦略局理事、青森県立美術館副館長事務

取扱などを歴任し、平成30年4月より現職